新型コロナウイルス感染症と岡山県産シャインマスカット「晴王®」

全国農業協同組合連合会 岡山県本部 園芸部次長　伊藤弘士

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)がもたらす社会的な影響は、中国武漢でウイルスが確認され半年以上経過した今でさえ毎日マスコミが報道している世界的な疫病となってしまいました。このような中での、岡山県のぶどう販売の状況などについてご説明します。

岡山県では、JA系統から出荷されるシャインマスカットを「晴王®」と2010年に商標取得しブランド化しています。

シャインマスカットは全国、いや世界的にブームとなっていますが、導入期には需要過多の状況で、見栄え・内容は関係なく物があれば売れる状況でしたし、政府が14年日本再興戦略改訂の中で輸出額１兆円を目標に掲げ輸出の取組みが加速されたこと、また近年のインバウンドの急速な拡大もあり、日本全国で栽培面積、出荷量増加にもかかわらず高単価販売が続いていました。

しかし、現在は経済的均衡を迎える成長期から安定期への過渡期になっていると推測される中、国内では年々増加している露地物の出荷ピークとなる秋には出荷増加による売れ行きの鈍化がみられるようになってきています。しかしながら、他種のぶどうからすればまだまだ単価は高いのです。

岡山県では数年前から出荷・選果基準の統一化と、岡山ブランドに適した房づくりに取り組んでいます。「作れば売れる」から「売れるために作る」に考えを変えていくこと、すなわち県内出荷産地が等階級格付けを標準化していくこと、各マーケットの要望に応じたぶどう作りをすることです。味覚、安心・安全はもちろんの事ですが、房・粒の見栄え、適正房型、出荷箱への詰め方等の対応をすることで、少しでも単価維持または単価下落を緩やかにさせる対策です。

コロナ禍による影響は、量販店では巣ごもり生活によりパック商品等買い求めやすい価格帯の商品は好調ですが、進物を扱う高級果専店、百貨店での高価格帯の販売は鈍化し、輸出は国外への航空便減少による輸送便の課題、インバウンド減少による爆買いが皆無になるなど需要の変化をもたらし、今後秋に向けて出荷増量期の不安は募るばかりです。

房づくりでは弊会園芸誌で「大房化傾向を改善しよう」と生産者に注意喚起したところ、地元新聞社から全国ネットニュースで「大きなぶどうつくらないで　JAなど農家に呼びかけ」と岡山県はコロナの影響から大房づくりをやめるという記事がトップニュースになり、生産者も小房を作るのかと騒ぎになりました。これは、極端な大房を作らない、つまり適正な房を作りましょうという内容でしたが、JA役員までの問題となりました。しかし、逆に多くの方に注目されているなと実感した次第です。

今後の影響は、まったく見通しの立たない状況ですが、さまざまな環境変化の中、産地の立ち位置を見極め、目的を明確にし、出来ることは躊躇(ちゅうちょ)なく実行し「晴王®」ブランドを盛り上げたいと思っています。また一刻も早い治療薬、ワクチンの開発により安心した生活が送れることを切に願っております。

（いとう　ひろし）

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/